

第27話（16頁） 火

お料理のおばさんがペチカの火をつけたまま、そとに出ていきました。火の粉がとんで、木ぎれにつきました。木ぎれがもえだしてしまいましたが、やっとのことで火をけしとめました。

「あまりに短くて、だから、どうなんですか、と言いたくなっちゃう。」

「どうにも批評のしようがない。なんにもない。そんな印象だね。『火が消えたんだって。それは、よかったね』と話しかけたら、もう終わっちゃう。」

「ペチカの火が飛んで木ぎれが燃え出し、やっとのことで消し止めた…と客観描写だけだ。」

「マッチ一本火事の原因。子どものころによく聞いた標語だけど、ペチカの火の粉火事の原因、と置き直せるかな。」

「料理中のおばさんは、なぜ、途中で外へ出たんだろうか？ どうしても出なきゃいけない用事があったのだろうか？」

「考えたって仕方ないよ。勉強している子どもたちも、ここでちょっと息抜き、ということじゃないか。」

「我々も、息抜きとしようか。」